

平成29年視察報告書・・・・・・資料1

1. 日程

視察年月日 平成29年8月2日(水) ～8月4日(金)

2. 視察先

- | | |
|-------------|-------------------|
| ・三沢市役所 | 青森県三沢市桜町 1-1-38 |
| ・久慈市役所 | 岩手県久慈市川崎町 1 番 1 号 |
| ・八戸市ブックセンター | 青森県八戸市六日町 16 番地 2 |
| ・十和田市民図書館 | 青森県十和田市西十三番町 2-18 |

3. 視察内容

【三沢市】(平成29年8月2日(水) 視察時間 午後3時から～5時まで)

I. 視察目的

「一次産品を活用した特産品の開発について」

II. 視察概要

◎三沢市の概要

三沢市は青森県の南東部に位置し、東は太平洋から吹く冷風な編東風(やませ)と柔らかい土壌が特徴の三沢市。

南はおいらせ町、西は東北町、北は六ヶ所村、などに隣接しており、国内で唯一、自衛隊・米軍・民間航空会社の3社が共同使用する三沢飛行場があり、約8,000人以上の米軍と約3,000人の自衛隊の基地を抱えた農業および商業都市である。人口は39,847人(平成29年3月末)、面積は119.87平方キロメートルである。

気候的は、北国でありながら積雪が少ないことと、北西から吹く季節風のため、晴天の多いことが特徴である。また、梅雨の不快さはあまり感じられないものの、梅雨明けは遅く、夏が短いのも特徴である。

一次産業を基軸とした地域産業に取組み、農産物は「ゴボウ」や「長芋」「にんにく」などの根菜類が多く、特に「ゴボウ」は日本一の産地との自負がある。また、水産品として、「スルメイカ」や「北寄貝」「ヒラメ」などの海産物のほか、畜産物として、「ブランドポークの加工品」や「パイカ肉」と呼ばれる豚バラ肉周辺の軟骨部位なども地域産業の特産でもある。

◎視察研修テーマ「一次産品を活用した特産品の開発について」

補助制度等の概要

三沢市の特産品開発は、県産農林水産物は、7割近くが生鮮のまま県外に出荷されているとにより、加工工場のある他の自治体に原料だけの出荷をせざるを得ず、三沢市の農家や漁業者の収入増につながっていない、という現状を変えようという試みである。

具体的な取り組みは、特産品づくりへの補助金制度、食品加工などを行うための起業支援制度、食品加工の試作機器が設置してある公共施設整備の3つが主なものであった。特産品づくりへの補助制度は、補助率が対象経費の2/3以内で上限額は100万円となっている。特産品の新規開発だけでなく、補助金を使って開発した特産品を、さらに後年度に改良する際にも活用できる。起業への補助金は県の地方創生関連のものとなっており、2年間の短期的な制度であるが、対象経費の8割以内で500万円を上限としている。食品の加工試作ができる施設は、フリーズドライ、真空冷却器、スチームコンベクションオーブンなど、地元農産品の加工試作のニーズに合わせた機器が設置されており、試作品作りを進める事業者は自由に使える。利用者からは好評とのことである。



Ⅲ. 所見

三沢市の制度は、基幹産業である地元産の農林畜水産等を活用した付加価値の高い商品づくりや市内外への販売を強化することが必要であることから、三沢市産の農林畜水産物を主な原材料として加工品とする場合、対象経費の2/3以内という点と、限度額が100万円という支援の手厚さが先ず大きい。さらに特筆すべき違いは、新製品の開発だけでなく、補助金を受けて開発した製品を改良する際にも使える、という点である。三沢市は、一度きりの開発費の支援ではなく、改良を重ねる費用についても支援をする、という考え方で事業を進めており、その結果、特産のゴボウを活用した「ゴボウ茶」は市を代表する

特産品に育ち、地元以外に首都圏などでも売り上げが伸びているほか、スルメイカや「パイカ」と呼ばれる豚バラ肉の関連商品も次々に生まれている。

実際に特産品を開発し、商品が市場に流通できるようになるまでには、先ず市場の調査を行い、開発した新製品を実際に展示会などで試験的に販売し、消費者から「量の多少」「味」「使い勝手」「パッケージ」などに対する生の声を聞きながら、改良を重ねて商品を作り上げる、という流れを経るのが一般的である。一度の試作開発ですぐに売れるものが作れるということはほとんどなく、消費者の声を聞きながら何度も何度も改良しなければ商品として市場に出せるものにはならない。試作品の開発だけでなく「改良に対する経費」も支援してもらえということ、特産品開発に関心のある、特に中小零細事業者や農家、個人事業主にとっては大きな負担軽減になり、特産品開発への意欲を高める制度と説明を受けて感じた…

京丹後市の新商品開発への補助金制度は、新規に開発する場合のみを支給対象とし、対象経費の1/3以内で30万円が限度となっている。生産者の所得向上が課題であり、そのためには、新たな加工品の開発や、新規の市場開拓も求められている。特に農家や個人事業主などが、積極的に特産品開発を活発に行えるような政策が必要である。そういう意味においても、三沢市は農産物加工施設を、三沢市の特産品である、ゴボウ、ニンニク、長芋などの調理・加工・研究し地域へ供給することで地産地消の実践、特産品の創出、食に対する意識の向上等を目的に、平成23年に建屋本体工事、建物構や施設を貸し出についても支援する、という考え方は重要であり、京丹後市も取り入れるべきと考える。



【久慈市】（8月3日（木） 視察時間 午前9時30分～11時30分）

I. 視察目的

「中心市街地活性化の取り組みについて」

II. 視察概要

◎久慈市の概要

久慈市は、岩手県北東部の沿岸に位置し、市の中心部は久慈湾の奥部にある。平成18

年3月に、旧久慈市と九戸群山形村が合併し市新たな久慈市が誕生している。人口（H27国勢調査）は、3万5642人で、年少人口比率12.6%、生産年齢人口比率57.6%、高齢人口比率29.5%となっている。面積については、623.5km²、山林が64.8%を占めている。また、産業における市内総生産は、約1374億円で、第1次産業が3.6%、第2次産業が33.0%、第3次産業が63.4%となっている。

久慈市の魅力と地域資源については、NHKの朝の連続テレビで、2013年に放映された「あまちゃん」の舞台設定としてとして有名であり、北限の海女や久慈琥珀、東北以北では唯一開催の闘牛大会や地下水族館で有名な「もぐらんぴあ」も集客力が高く、日本一の規模を誇る平庭高原も魅力的とのことである。また、歴史が640年以上も続く「久慈秋祭り」は歴史や歌舞伎の名場面を題材にした絢爛豪華な山車や威勢の良い掛け声で県内外からの人出で賑わうとのことでした。

◎中心市街地の現状と課題

久慈市の中心市街地に国道281号線、国道45号線が通っていたが、昭和62年に国道45号線バイパスが中心市街地外の東側に完成したことにより、地域の衰弱化が始まっている。具体的には、複数の老舗商業施設や大手スーパーの撤退。県立久慈病院の郊外への移転。一方、外部資本による郊外型の大型店の集積エリアが国道周辺に誕生している。このことにより、20年間で中心市街地の売り場面積が56.2%減、年間販売額は75.5%減となっている。

また、平成23年3月に発生した、東日本大震災において津波等により311億円の被害が発生しているし、昨年8月30日に来襲した台風10号の被害により2445棟が浸水し、195億円の被害が発生したところで、中心市街地活性化の取り組みを停滞させているところである。

◎旧中心市街地活性化法時代の取り組み

平成10年に旧中心市街地活性化法（名称：中心地における市街地整備改善及び商業等の一体的推進に関する法律）が制定され、久慈市においても平成12年3月に中心市街地活性化基本計画を策定。商工会議所においても同年5月に基本構想を策定し、市の認定を受けている。旧中活法時代の取り組みとして、電線類の地中化、ご近所介護ステーション開設、商店街のファサード（ひさしの意味）事業、シャ人口や歩行者・自転車通行量は微減している。中心地での商店の商品販売額の推移についても厳しい状況である。

◎新法制定以降の取り組み

平成18年に中心市街地活性化法（名称：中心地における市街地整備改善及び商業等の一体的推進に関する法律）が改正になり、平成19年5月に、青森市・富山市に続き、全国で3番目に内閣総理大臣の認定を受けた基本計画期間は、平成19年から平成24年3月が、東日本大震災を受け、平成25年3月まで延長を受け、第1期としてスタートしている。メイン事業として、大手スーパー跡地に「やませ風土館」を平成20年4月に整備している。この整備運営については、平成17年12月に（株）街の駅・久慈を設立し、

個人・地元中小企業から、株主１０１名、１億８４１０万円（個人からの出資４割）の出資が集まり、地域ぐるみの会社を設立し、平成２０年４月８日にオープンし、内閣府からも高い評価を受けている。

第１期基本計画登載事業として、県立久慈病地 巽山公園、市民の森を市民の「憩いの空間」として平成２０年から２２年まで一体的に整備を進め、中心市街地の魅力アップに努めている。イベントとしては、県立久慈病院跡地広場や「やませ風土館」活用したものも多く見受けられる。



ソフト事業として取り組んでいる成功店モデル創出・波及事業として、やる気のある経営者を個別に抽出し、選択と集中により重点支援を行い市街地全体の活性化に繋げている。テナントミックス事業としては、小売、飲食、サービス業の新規出店事業者に対し出店工事費に対し１００万円の助成を行っている。また、空き店舗対策チャレンジショップ事業として新規出店の未経験者等に対し家賃の一部助成も行っている。

◎第２期中心市街地活性化計画の取り組み

平成２６年３月に内閣総理大臣認定を受け、第２期計画の概要については、期間は平成２６年４月から３１年３月までで、基本コンセプトは、「山・里・海を丸ごと愉しめる結が支える賑わい・安心の街」としている。計画の中で大きな事業は、久慈駅前整備事業であり、市街地の西側に位置する「やませ風土館」と連携をすることにより市街地の人の流れを面的に拡大することに目的を置いた内容となっている。具体的には、駅前交通広場や複合施設として観光・地域交流機能を充実した施設として整備である。事業費は約２３億円、財源は社会資本整備交付金（補助率５０％）と合併特例債を活用し、駅前交通広場として、バスターミナルの整備、イベント広場（平成２９年完成予定）や現図書館を移転し規模を



拡大するとともに観光交流・地域交流機能を持つ複合施設の整備。利用者のための便益施設として、コンビニエンスストア等の民間施設を併設、３階建て、延べ面積約２３００㎡を想定、あわせて駐車場を整備し、平成３１年度中に完成予定の事業をも計画されている。

Ⅲ．所見

直接的な要因は国道281号線及び国道45号線が市街地を走る、旧国道45号線のバイパス化により、市街地からルートを変更がなされ、車社会における交通量の増大は、必然的に新たな幹線道路の整備が求められ、国民の生活様式の変化をもたらし、生活必需品の大量消費は、自動車による買い物が前提となる。しかし、中心市街地は区画が小さく、自動車を駐車するスペースが不足していることにより、市街地の再開発の必要性に迫られ、旧中心市街地活性化法を根拠にした活性化計画を定めたのが大きな変化であった。自治体は全国に約700あったと言われている。

しかしながら、中心市街地の活性化事業や区画整備事業は大変大きな事業費が発生するとともに、お互いの権利が錯綜することにより事業が遅々として進まないのも現実である。一方、久慈市においては、市街地内のまとまった用地の活用、具体的には旧県立病院跡地、大手スーパーや老舗商業施設等の敷地を再開発等一定恵まれた条件も存在している。平成12年の基本計画策定から今日まで多くの取り組みが実施されて一定効果も上げていると考えるが、地理的要件にも恵まれている。岩手県北東部に位置し、周辺には九戸郡の町村があり、地域の商業の中心地となっていて、人口減少率も京丹後市と比べ穏やかな状況といえる。2001年の東日本大震災による津波の影響も、その後に訪れる「あまちゃん」ブームにより活力を維持しているが、今年の台風10号による浸水で、市街地の定住人口及び歩行者・自転車の通行量は大きく減じている。官民を巻き込んだ取り組みに力があり、民間の活力を生かす手法は、学ぶ点が多いと感じている。

京丹後市は昭和の大合併により、旧6町が合併し誕生したが中心市街地と言える規模には至っていない。都市計画マスタープランを策定し、魅力的なまちづくりを推進するための行政としてのハード整備をどう進めていくのか、(仮称)大宮峰山ICのルートもほぼ決定している状況において、都市拠点地域を中心とした交通結節機能の再構築及び文化機能と子育て支援機能を包含した行政施設の整備が必要であるが、道路や店舗等の密集により、計画的なまちづくりをするうえでも早急な取り組みが必要である。このことが、人口減少社会における京丹後市の魅力アップに繋がるものであり、若い世代に夢と希望のあふれるまちづくりに取り組みを進めていきたいと考えている。

【八戸市】(8月3日(木)視察時間 午後2時30分～午後4時30分)

I. 視察目的

「八戸ブックセンターについて」

II. 視察概要

◎八戸市の概要

太平洋に臨む青森県の南東部に位置し、北はおいらせ町及び五戸町、西は南部町、南は階上町及び岩手県軽米町に接し、夏は偏東風(ヤマセ)の影響を受け冷涼で、冬は晴天が多く乾燥し、北東北にあり降雪量も少なく、日照時間が長い事も特徴になっている。

主な産業は、臨海部には大規模な工業港、漁港、南部港が整備され、その背後には工業地帯が形成されている。平成17年3月31日に南郷地域（旧南郷村）と市町村合併し、現在市域面積は305.5Km²、人口は、233070人となっている。八戸市では、中心市街地活性化基本方針を策定し、多様な都市機能が集積する活力あるまちづくりとしてのコンセプトとして、「本のまち八戸」の拠点を、「ほんや目指し、市が主導で、民間書店と連携し「本のある暮らし」を実現するために、八戸市ブックセンターの開設に至ったことを受け視察した。



◎八戸ブックセンターの整備の背景について、

八戸ブックセンターは、市長の政策公約の掲げる「本のまち八戸」を推進する中心拠点として、本に関する新たな公共サービスを提供することで、市民が様々な本に親しみ、市民の豊かな想像力や思考力を育み、本のある暮らしが当たり前となる文化の薫り高いまちを目指し、当施設を町の中心市街地の活性化にもつなげることを目的として開設した。

◎施設の概要について

八戸ブックセンターは、株式会社江陽閣が、旧レックビル・マルマツビル跡地の六日町側に建設した複合ビルは、商業・業務機能を有する4階建てで、2階と3階はオフィス、4階は屋上テラスと飲食テナントを配置し、1階に「ガーデンテラス」を設け、約1,100m²の敷地には、屋根と壁がガラス張り、2階デッキを擁した全天候型の多目的広場「三日町賑わい拠点」が整備され、水・緑・光などの自然を感じられ街なかの「庭」の役割を担う「マチニワ」をコンセプトとし、日常的に人が集う場所として、八戸ブックセンター

で購入した本を広場で読んだり、広場を活用して本にまつわるイベントが開設されている。

◎施設運営の基本方針について

八戸に、「本好き」を増やし、八戸を「本のまち」にするための、あたらしい「本の暮らしの拠点」というコンセプトに基づき、3つの基本方針を定め、それに則った施策を実行している。

《3つの方針》

・方針1 本を「読む人」を増やす

これまで出会いの機会が少なかった本が身近にある環境を作り、本を手に取りたくなる工夫を凝らした陳列や空間を設計やイベント開催など。

・方針2 本を「書く人」を増やす

八戸市は、三浦哲郎という偉大な作家の生地でもあり、「本好き」が高じて「書く人」を増やすための、執筆するためのブースや相談窓口等のワークショップの開設。

・方針3 本で「まち」を盛り上げる

本は一人で読むものであると同時に、得た知識や情報を、感情、思考などを共有することで、本を介したコミュニケーションを生み出す様々な施策展開。

基本方針は、子どもから大人までが本と出会い、親しむ環境づくりに取り組んでいく中で、市が直営による運営しますが、民間書店や図書館と適切な機能分担を図りながら、本に対する新たな公共サービスを提供することとする。施設機能として、貸出エリアは2種類で使用料無料、椅子・机・Wi-Fi 完備されている。他にも

- ★ セレクト・ブックストアは、一定のテーマごとに編集した本の陳列。
- ★ 読書会ルームは、20人規模で読書会活動をされている市民団体などが利用など、ワークショップやトークイベントも開催。
- ★ 読書席は、塔のような高い本棚に囲まれた場所で、ハンモックがつるさた場所。
- ★ カンヅメブースは、未来の書き手をサポート。本や論文をと執筆したい方向けに集中できるブース。
- ★ ブックセンター・ギャラリーは、本の面白さを伝える展示、特定の作家や作品、本の印刷・造本・装丁など展示の合わせたギャラリートーク。
- ★ ドリンクスタンドは、本棚や読書席にドリンクホルダーを設置し、ドリンクの提供を行う。
- ★ カウンター席は、「八戸ブックセンター」と「本のまち八戸」の総合案内窓口。など



の機能がある。

◎八戸市ブックスタート事業内容について

政策公約事業を基に、2014年度からスタート事業

ア. 本のまち八戸」を目指し、赤ちゃんを対象にした「ブックスタート」と、生後90日から1歳未満までの赤ちゃんが対象にし、ボランティアによる絵本の読み聞かせ、絵本等が入ったブックスタートバックプレゼント。

イ. 新小学生を対象にした、書店と連携し、書店で利用できる「ブッククーポン（一人2,000円分）」の配布を行うとともに、書店で自ら本を選び購入する体験。（2016年度利用率 95.1%）

◎ 政策公約事業以外にも、本のまち関連事業を展開

ア. 読み聞かせ「キッズブック事業」

3歳児を対象に、読み聞かせに適した絵本の購入できる「キッズブッククーポン」を配布。

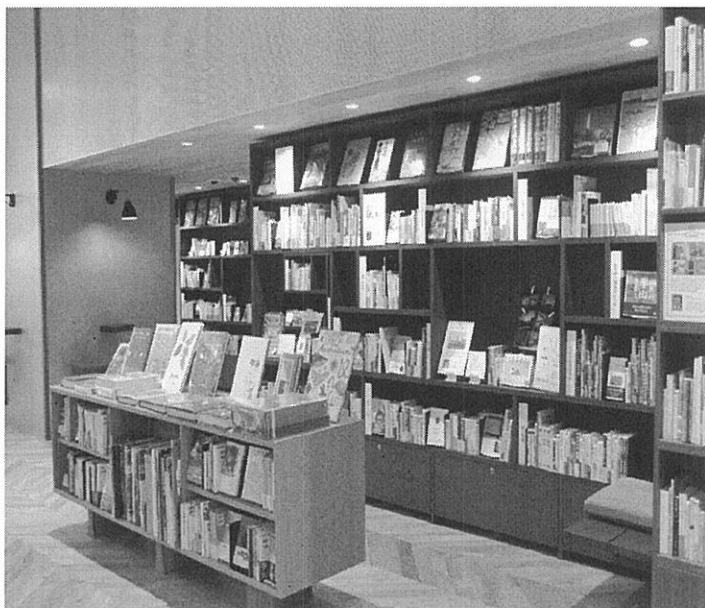
イ. 学校図書館司書の配置

県内で初めて学校図書館司書（3名）を配置し、市内小学校を巡回。

ウ. 一箱古本市の開催

八戸市中心街の「八戸ポータルミュージアムはっち」内で、一箱古本市を開催。

エ. 施設ディレクションは、ブックコーディネーターの内山晋太郎氏で、「本屋 B&B」を博報堂ケルトと協業で開業し、ブックコーディネーターとして、本にまつわるあらゆるプロジェクトの企画やディレクションをされている。



Ⅲ. 所見

八戸市ブックセンターは、八戸に「本好き」を増やし、暮らしの中で「本」と親しみ、本からの情報を基に、人とのコミュニケーションを作りながら、市

内の民間書店とも連携し市民の豊かな心を育む、「本のまち八戸」を目指し、本に関する新たな公共サービスとして、市長の政策公約が生かされ、市街地中心地に市が主導で民間書店と連携し、本のセレクトショップ「八戸ブックセンター」開設された。

施設内には、本棚に囲まれた席やハンモック席、八戸が生んだ芥川賞作家の三浦哲郎や日本初のジャーナリストで「婦人之友」創刊者・羽仁とも子のブースなどを設置し、さま

さまざまな読書席があり、気に入りの場所でドリンクを片手にゆっくりと読書を楽しめる。本に関するイベントや本の面白さを伝えるギャラリーなど企画を凝らした展示がされ、民間書店で取り扱いの少ない本を陳列し、一度手に取って読むことで知的好奇心を刺激するような本が陳列されていて、図書館でもない不思議な空間があるブックセンターであった。

本市は、各旧町で図書館が設置され、現在は 2 館 4 室の図書館し図書館には司書を配置し、本の陳列やこどもの読み聞かせなど様々な取り組みがされている。現在、京丹後市としての図書館のあり方も審査会を設置し現在検討されている。

図書館を単に本を陳列し、貸し出しを主体としたものでなく、市立図書館的にしっかりと「本」をキーワードとして、市内の書店と連携しながら、市民が集い、語らい、そして憩いの中にもなるような機能を生かした施設にしてほしいものだと考える。

【十和田市】（8月4日（金）視察時間 午前9時30分～午前11時30分）

I. 視察目的

「図書館建設経過と運営について」

II. 視察概要

◎十和田市の概要

青森県内陸部にある十和田市は、人口約6万3千人の自治体であり県内第4位の人口の都市である。平成17年1月に旧十和田市と旧十和田湖町との新設合併により誕生している。市西部には、十和田湖、奥入瀬溪流、八甲田山系など、十和田八万平国立公園に指定されている。市東部には奥入瀬川や稲生川などが潤す田園地帯や、碁盤の目状に広がる中心市街地があります。

この地域は、十和田火山大噴火による灰の堆積によって、雨水は地中に染み込み、樹木も生えにくく、作物も育たない不毛の原野だった。江戸時代末期に、南部藩土の新渡戸傳によって、十和田湖・奥入瀬川を水源とした人工河川の工事に着手し、4年の歳月をかけて三本木原の上水に成功した。昭和に入ると国営開墾事業として継承され、県内屈指の穀倉地帯と

して発展を遂げました。新たな都市計画が進められ中心市街地は、「碁盤の目」を整然と区画された美しい街並みが特徴で、その象徴的な場所が1、1キロにわたる真直ぐな道、官庁通りです。平成17年、新しいまちづくりの一環として、官庁街通りという屋外空間をひとつの美術館に見立てた「Arts Towada」計画を実施し、十和田現代美術館



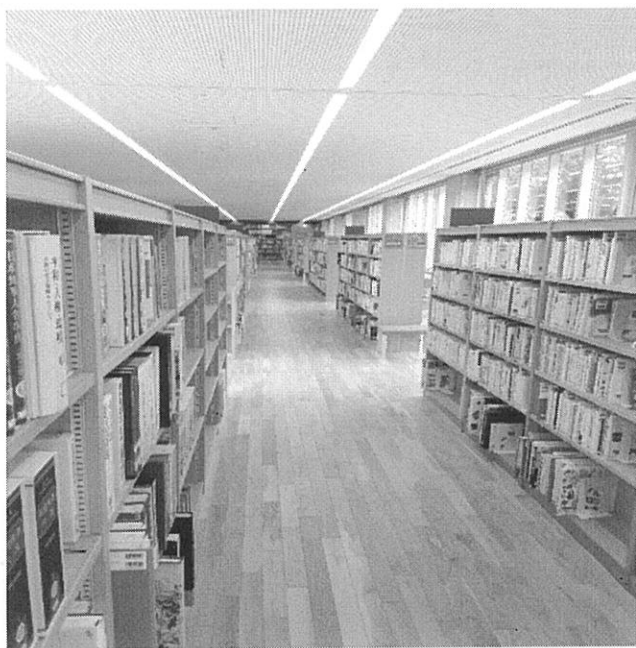
やアート広場を整備している。

◎市民図書館建設とまちづくり

市街地に位置する官庁街通りは、1969年都市計画街路として作られ、シンボルロード事業として平成元年から整備を行っている。幅員36mのうち車道11m、その両側が歩道で12.5m、延長1.2km、道路に樹齢80年を超す桜が156本、ゆったりとみごとな風景である。その一角に教育プラザが、図書館と教育研修センターの機能を併設した施設で、今までの2倍の広さとなっている。通り全体を見立ててアート作品を配置している。その中核施設が、西沢立衛氏設計の現代美術館であり、人口の2倍近い年間来場者が2009年のオープン以来集っている。屋外オブジェには、草間彌生氏の作品もある。また、近くの商店街には市街地活性化施設として、隈研吾氏設計の市民交流プラザもある。

今回、教育子プラザには安藤忠雄氏が公募型プロポーザルの結果、設計している。ア

ートな十和田を標榜している市長の思いが詰まったまちづくりになっている。



◎市民図書館運営について

施設概要は、鉄筋コンクリート造り1階建。建築面積は、3407.85㎡（図書館2574㎡）。延面積は、3199.04㎡。敷地面積は、9519.46㎡。建設費は、約14億5千万円。開館は、平成27年1月15日。開館時間は午前9時から午後8時まで。休館日は、毎月第4木曜日、1月1日から1月4日及び12月29日から12月31日、蔵書点検期間と

して年間5日以内となっている。

1) 基本方針

従来の図書貸し出しサービスを維持するとともに、市民が必要とする資料・情報の提供を通じて、市民生活を支援し地域を支える情報拠点として積極的な図書館活動を展開します。

2) 運営方針

ア. 図書館サービスの充実

- ・ 図書館資料の収集（取扱要領）
- ・ ICシステムによる利用者の利便性の向上
- ・ 学校を利用した遠隔地貸出返却サービス

合併後に十和田湖町の図書館を閉鎖し、十和田湖公民館として蔵書、約7,000冊、利用者200人、利用冊数500冊として、活用されているが、残り2館の南公民館、東公民館と同程度の図書館機能となっている。大きな要因は、公立学校等を活用した上記システムが大きく貢献しており、図書貸し出しに対する遠隔地の要望に込えている。

- ・身体障害者への宅配貸出の実施
- ・図書館ホームページの活用
- ・レファレンスサービスの充実と利用促進
- ・雑誌スポンサー制度の充実

政治、宗教的な新聞の寄贈が9部、雑誌については、寄贈及び出版元からの提供が23部と出版物として社会通念上広く認められているものを積極的に受け入れ、閲覧できるようにしている。

- ・図書館ボランティアの育成

イ. 子どもと諸活動の支援

- ・「家庭読書の日」の普及啓発
- ・学校図書館協議会への支援（読書感想コンクール補助）
- ・子どもバイオバトルの実施

児童、一般の部に分かれて、発表者が紹介（3分～5分）した本について、参加者全員で「どの本が一番読みたくなったか？」を投票し。最多票を集めた本を「チャンプ本」として決定している。

- ・子ども司書養成講座の実施

図書館業務の体験を通じて、司書の知識や技術等を学び、読書の素晴らしさを広め、ひとと本との橋渡しを手助けする読書活動推進の担い手として司書を養成している。

- ・学校、保育所等へのセット貸出、団体貸出
- ・読書活動推進事業の充実
- ・ヤングアダルトサービスの普及
- ・図書館を使った調べる学習コンクールの実施

ウ. 市民学習活動・課題解決の支援

- ・読書会の実施
- ・地域課題に対応した企画展示
- ・十和田市観光版フレットの展示
- ・本のリサイクルフェア実施

平成28年度は11月に2日間実施し、市民378人、近隣町村住民29人が参加し、家庭で読み終わって不要になった本を収集し、再利用してもらい、読書活動推進に役立てている。

- ・社会福祉施設等へのセット貸出

以上具体的な運営方針を列挙した。これ以外にも、他の図書館やその他関係機関との連携・協力。図書館サービスの点検・評価等についても運営方針を定めている。

Ⅲ. 所見

十和田市の官庁街通りは、松や桜の樹木が歩道にゆったりと存在しており、車まっすぐも延びる道路と老木、そして多様なオブジェが初めて訪れる人を豊かな気持ちにさせるまちであることに感動した。また、約50年をかけて官庁通りを育ててきた行政と市民の心意気きに感動した。これは京都の街並みを参考に作られたと伺った。

京丹後市は、合併して14年目を迎え、都市計画マスタープランを策定したところである。市内には旧町時代にそれぞれに、行政施設や商店街が歴史の中で形成されてきており、京丹後市の中心市街地が形成されている状況にはない。

現在、山陰近畿自動車道路の（仮称）大宮峰山IC事業化及びアクセス道路も固まりつつある中で、若い世代の人々に、京丹後市を選んでいただく、住み続けていただくためにも中心市街地の新たな形成、それに伴う行政のサービス機能のその地域での展開も、魅力あるまちづくりには必要不可欠と考えている。都市計画マスタープランにあるように、都市拠点地域を中心にした再構築及び文化機能と子育て支援機能を包含した行政施設の整備が必要である。

その一つが複合施設を含む図書館構想だと考える。そのため、人口規模や面積要件、財政要件を勘案し、類似団体である十和田市の市民図書館を視察したところである。今後、市立図書館協議会で議論されることになるであろうが、単なる図書館をということではなく、将来を担う子供たちに何を与え、どのように育むことができるかが課題であると考え。周辺地の活用しながら公園化した広場のまちづくり、アートをテーマにした市民参加のまちづくりが望まれる。

